

匹見町埋蔵文化財調査報告書第25集

—荒木谷川荒廃砂防工事に伴う—

長通遺跡

平成10年3月

島根県匹見町教育委員会

—荒木谷川荒廃砂防工事に伴う—

長 通 遺 跡

平成10年3月

島根県匹見町教育委員会

例　　言

1. 本書は、島根県益田土木建築事務所の委託を受けて、匹見町教育委員会が平成8年度に行った荒木谷川荒廃砂防工事に伴う、長通遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査主体　匹見町教育委員会

調査員　渡辺友千代(匹見町教育委員会文化財保護専門員)

調査補助員　栗田美文　大賀幸恵　大谷真弓

調査指導　島根県教育委員会文化財課

中村友博(山口大学人文学部教授)

事務局　斎藤惟人(匹見町教育委員会教育長)

渡辺隆(匹見町教育委員会次長)

斎藤一臣(匹見町教育委員会主任主事)

発掘作業員　栗田定　森脇雅夫　渡辺照　寺戸淳二

阿部嘉彦　長谷川時子　溝田久子　山崎リマヨ

西田キヌエ

3. 発掘調査に際しては、益田土木建築事務所匹見出張所の佐伯技師をはじめ、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただくとともに、山口大学人文学部の中村友博教授からも一方ならぬご教示を得たことに対し、ここに合わせて感謝の意を表したい。

また、発掘現場においては、所有者の大谷実氏のご理解とご協力を得て、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、柱穴—P、土坑—SK、住居址—SIと略号した。

編集にあたっては、栗田美文・大賀幸恵・大谷真弓らが携わり、執筆・編集は渡辺友千代が行った。

目 次

第1章 発掘調査の経緯と経過	(渡辺友千代)	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1	
第2節 発掘調査の経過	1	
第2章 地形的立地と周辺の遺跡	(渡辺友千代)	2
第1節 地形的立地	2	
第2節 周辺の遺跡	2	
第3章 調査の概要	(渡辺友千代)	5
第1節 調査区の設定	5	
1. はじめに	5	
2. 調査区の設定	5	
第2節 層位と層序	6	
1. 基本的層序	6	
2. 層位と層序の状況	6	
第3節 造構	10	
1. ピット (P)	10	
2. 土坑 (S K)	10	
3. 竪穴住居址 (S I)	11	
第4章 出土遺物	(渡辺友千代)	17
第1節 遺物の出土状況	17	
1. はじめに	17	
2. 遺物の出土状況	17	
第2節 実測遺物	18	
1. はじめに	18	
2. 実測遺物-1	18	
3. 実測遺物-2	23	
第5章 小括	(渡辺友千代)	24

挿図・図表目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	調査地点と周辺の遺跡	3
第3図	調査区配置図	4
第4図	上層図	5
第5図	遺構指示図	7～8
第6図	住居址遺構図	9
第7図	遺構図	13～14
第8図	遺物平面分布図	15～16
第9図	出土土器実測図(1)	20
第10図	出土土器実測図(2)	21
第11図	出土石器実測図	22
第1表	遺構計測表	11
第2表	出土遺物集計表	18

図版目次

- 図版1 (a) 調査地点遠望（北から）
(b) 調査地点の草刈作業（北東から）
(c) 調査区の実測作業（北東から）
- 図版2 (a) 発掘作業風景（北から）
(b) 中央ベルト壁の層序状況（北東から）
(c) 西壁の層序状況（南東から）
- 図版3 (a) 南西からみたSK01（半截検出状況）
(b) 土坑・ピット遺構の完掘状況（東から）
(c) 須恵器（右）・石器出土状況（左）
- 図版4 (a) 竪穴住居址の表面状況（東から）
(b) 西からみた竪穴住居址の検出状況
(c) 東からみた竪穴住居址の検出状況
- 図版5 (a) 北壁に表出した黒色土陥入状況（竪穴住居址）
(b) 西からみた竪穴住居址などの遺構検出状況
(c) 南からみた遺構検出状況
- 図版6 (a) 土器類出土遺物
(b) 石器類出土遺物

第1章 発掘調査の経緯と経過

第1節 発掘調査に至る経緯

本調査の発端は、平成7年10月、島根県益田土木建築事務所匹見出張所から口頭による、当地点周辺の砂防工事の予定があることが伝えられるとともに、埋蔵文化財にかかわる問い合わせがあつたことから発生した。よって文化財担当者は、口頭による回答として、周辺近くには水田ノ上といった著名な遺跡があること、また下正ノ田・石仏町などの遺跡が分布していることから、分布（試掘）調査が必要である趣意を伝えたのであった。

その後、平成8年6月14日付の益田土木建築事務所第696号の発送番号で「荒木谷川荒廃砂防工事に伴う埋蔵文化財取り扱い」についての文章を受理した。発掘調査担当の教育委員会は、それを受けて同年7月5日付で、同地点（工事予定地）周辺には周知の遺跡が分布していること、立地的に判断しても遺跡の可能性が大きいこと、また分布調査を行うこととしても他の調査に忙殺されていることから、早くとも同年の9月以降になることを文章で通知したのであった。そして当教育委員会は、道川地区の県営圃場整備事業に伴う塚ノ町遺跡の調査の日程がついた同年8月、同年の9月初旬に調査に入ることを伝言したのである。

第2節 発掘調査の経過

分布調査は、平成8年9月10日から始め、完了は同月18日の8日間で、そのうちの実質稼働日数は6日間、また人数は41人役を費やして行った。

分布調査の結果、下層に須恵器・土師器を伴う包含層が認められたため、遺跡と断定するとともに、その旨を主体者の島根県益田土木建築事務所に報告した。その後、それを受けた主体者側から、事業が逼迫しているため早急な対応を、と懇願される。よって早急な対応をすべき

当委員会では、県教育委員会にその旨の諒承を求めるとともに、本格調査を要するために、文化庁宛に埋蔵文化財発掘調査の通知を同年9月19日付で提出したのである。

したがって緊急を要したため、本格調査は同年9月24日から手掛け、同年10月29日には終了したのであった。



第1図 遺跡位置図

(渡辺 友千代)

第2章 地形的立地と周辺の遺跡

第1節 地形的立地

本調査地点は、匹見町の大字地区の紙祖という地名にあって、その字名を荒木（あらき）と称する地区に存在している（第2図）。

その地区は、北東—南西に走る匹見層群といわれる断層谷に立地し、そこを貫流する紙祖川は、その断層谷に従って北西端部を河岸段丘を形成して北東流している。こうした断層谷に立地しているため、狭長ながら、そこは本町でも最も広い可耕地が形成された地区である（第2図・図版1-1）。また、この水田や人家が点在する可耕地の標高は、凡そ260~270m測り、そして断層谷を挟んで端部を2走する急峻な山地は凡そ600~700m台を測って、そこはナラ林を主木林としているが、スギ・ヒノキなどの人工林も育成されつつあり、そのため今日では飢渴したツキノワグマやイノシシなどの生息動物が時折り、人里を徘徊するといった現状下にある。

また、紙祖という地名にみられるように、本地区は藩制期において盛んに製紙業が行われた地区であったため、その山地では原料となるミツマタやコウゾが植生され、焼畑も行われていた。一方、河川では現在でも遷河性のゴギ・ヤマメなどの鮭鱈属が生息しており、昭和の初めごろまではニジマスもかなり捕獲されていたというが、今では希となってしまった。

第2節 周辺の遺跡

本地区は比較的可耕地が形成しているため、古くから拓けていたらしく、周辺には原始古代、または中世などの歴史的遺跡が河岸段丘面に沿って分布している（第2図）。

例えは、著名な遺跡としてあげられるのは、まず調査地点の南西（上流）側200mにある縄文時代晩期の水田ノ上遺跡であろう。この遺跡からは勾玉などの玉類をはじめ、土偶あるいは円盤形土製品などの呪術具が出土されており、とくに配石を伴う遺構とのセットとする発見は、斎場または葬送のあり方を暗示させるものとして、貴重な遺跡であるといえるであろう。また同遺跡の隣接には古墳時代の住居址である下正ノ田遺跡があり、そして400m上流には長クロ遺跡という平安時代初期の集落址が存在しているのである。一方、下流の北側200mには古墳時代末期の住居、および縄文時代の遺物が出土した石仏頭遺跡が分布している。^[註3]

そのほか2km上流側の、狭長の段丘面によって形成された可耕地の端部には阿高・並木式が出上し、九州との関わりをもった石ヶ坪遺跡、そしてその山崎には中世の堅固な山城址などといったように、同可耕地には比較的多くの遺跡が存在しているのである。

（渡辺 友千代）

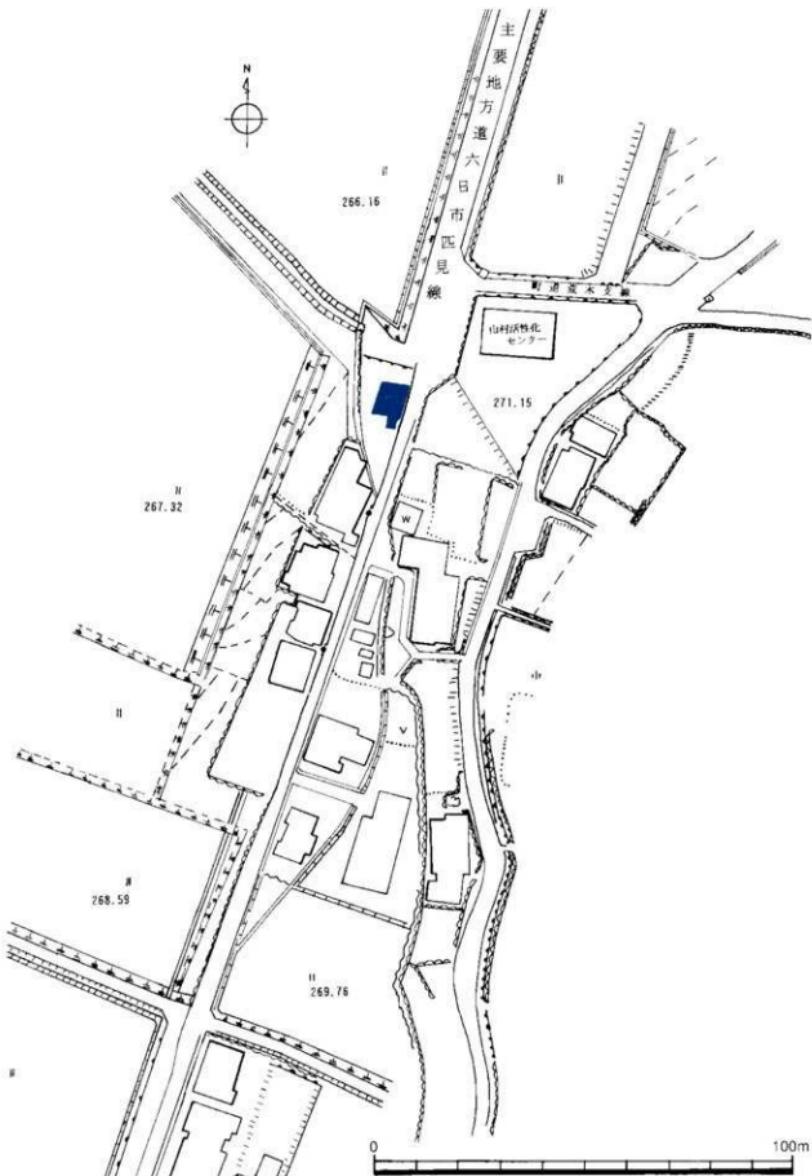
[註1] 今岡照宮 「「匹見層群」」 『中国地方地学事典』 中國新聞社 1987

[註2] 匹見町教育委員会 「「水田ノ上A遺跡」」 『「水田ノ上A遺跡・長クロ遺跡・下正ノ田遺跡」』 1991

[註3] 匹見町教育委員会 「主要地方道六日市匹見線特殊改良工事に伴う 石仏頭遺跡発掘調査報告書」 1993



第2図 調査地点と周辺の遺跡



第3図 調査区配置図

第3章 調査の概要

第1節 調査区の設定

1. はじめに

本調査地点は、島根県美濃郡四見町大字紙祖イ125-3番地に所在し、もと住宅敷地（現の半年まえ）であった場所である（第3図）。

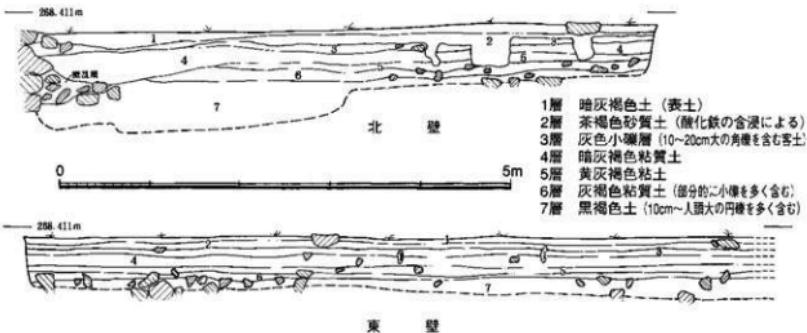
なお本調査が発生した経緯は、第1章に記述しているとおりであるが、本地点が河川砂防工事の予定ルート内であったことによるものであり、また前住宅地（転移）であったということも、本件の事象に起因しているものであったのである。

2. 調査区の設定

試掘とした調査区は、まず約100m²の調査対象地（もと住宅敷地）のほぼ中央に任意に設けることから始めた。それは磁北方向（下流側）に向かって、A区と称する幅2m、長さ6mのものである。そしてB区と称するものは、Aから南側へ2mを測った地点に、2mの方形区のものとした。つまり北—南方向に直列に2区を設けたことになり、したがって発掘面積は合わせて16m²であった。なお、増設の余地は充分あったのではあるが、後は掘削する段階で、状況（遺物の有無）判断することにして一応、前者の2区にとどめることにして掘削することにしたのである。

その結果、1層の暗灰褐色土（表土）、2層の茶褐色土、3層の客土、4層の暗灰褐色土と下層に序層する中で、4層に須恵器・土師器を中心とした遺物が、とくにA区を中心に検出されはじめたのである。これらの遺物の包含は、以下の層位（一部下位層に掘削）にも至っているらしいことも確認されたので、今後の対応も考える必要があるため、一応その事点で中断することにした。それは工事のために、緊急に本格調査への切り替えが必要であったからであった。

本格調査のための調査区の設定は、遺物がA区に偏在して出土したので、そのA区を中心にして、つまり北側面を拡張することにしたのである。しかし拡張するといつても、東側は県道が北東—南西方向に走っているため、それに順応するように実測し、また西側は石垣で陥り込んでいて搅乱的



第4図 土層図

に捉えられたので、端部までは測らず、その余地をのこして東側から幅7mを測ることにしたのである。そして北—南方向の長さは9mのものとしたが、ただ両端の対抗する軸は西—東線上とした。したがって、区形は菱形を呈することになり、またB区との間は東側を斜向に、西側は磁北方向に結んで変則な区形とし(第3図)、その実測面積は62.14m²となった。

第2節 層位と層序

1. 基本的層序

本遺跡における基本的な層序は、表上の暗灰褐色土(1層)、茶褐色砂質土(2層)、灰色小礫層(3層)、暗灰褐色粘質土(4層)、黄灰褐色粘土(5層)、灰褐色粘質土(6層)、黒褐色土(7層)の順に堆積していた(第4図・図版2-b)。

以下、堆積層を上位層から下位層へと、その状況をみていくこととする。

2. 層位と層序の状況

その1層は、暗灰褐色を呈した表土であり、宅地であった関係か、当時期の木片や焼土痕あるいはセメント痕などが混在し、その土質は水山耕作土であったものと思われた。層厚は3~7cmと、ほぼ東半は平坦に堆積していたが、河側の西半に向かっては20cm余り測って陥ち込んでいた。そして2層は、酸化鉄分の含浸による砂質性の茶褐色土。層厚は、尖滅部分や30cmを測る部分もあって、厚薄差が著しい層位であった。

灰色で小礫を含んだ3層は、東半に5~15cmを測って堆積していたが、河側の西半に向かって尖滅し、そして西端部に向かって欠除していた。中には20cm大の角礫を含んだものもみられ、頭初は東側の山裾からの流入土とみられたが、比較的平坦に堆積していたことから、また土質や上位層の状況から考えて、水山のための床土としての客土ではないかと思われた。4層は、有機物を比較的含んでいると思われる暗灰褐色土である。やや粘質性で、層厚は10~30cmを測り、河側の西半に向かって厚くなつて陥ち込む。遺物は本層に限らず、上位層にも比較的みられたが、とくに土師器・須恵器類がまとまりをもつて顯著であった。よって遺構は検出することはできなかったものの、これらの遺物は本層に相伴するものと想定された。

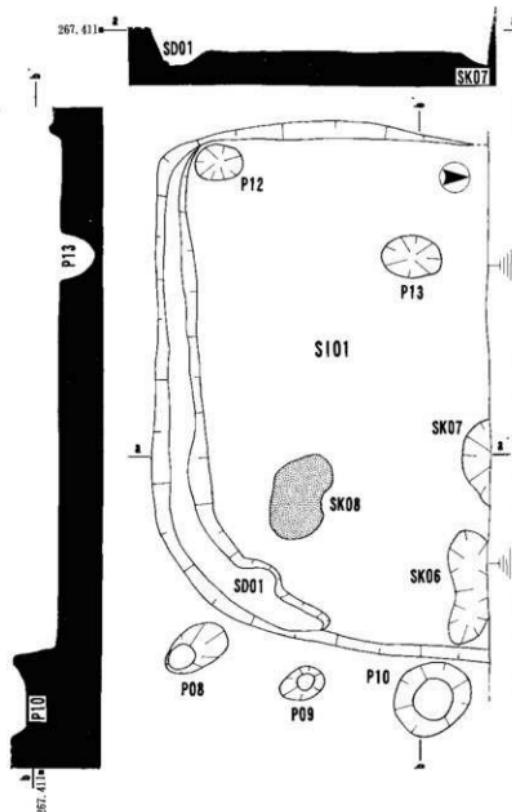
5層は、黄灰褐色した粘土であった。層厚は5~20cmを測り、全体的に南東(山裾寄りの上流)側が薄く、その対応する北西側へ向かって下がりながら厚くなっていた。本層からは数点の遺物を検出しているが、土質的あるいは層位的にみて見誤った可能性もあったのではないかと思われる(後の整理の段階)。と、いうのも後述する4節あるいは4章でみていくことにするが、4層で土師器・須恵器類がまとまりをもつて、そして後述の7層では弥生土器を中心として、それを共伴する住居址などの遺構類が顯著であるということが、そのことを物語っているのではないかと捉えられるからである(第2表)。6層は灰褐色した粘質土で、部分的に5cm大の礫を比較的多く含んでいる層位である。層厚は7~18cmあって、山裾の東半は薄く比較的の平坦であったが、とくに北西側へは下がつて深く堆積する。しかし、その北西端部は極端に尖滅していて、上位の4層が陥入していたのである。これらは恐らく旧くの紙祖川による溢流などによって崩壊され、欠除したものとみられる。なお本層には、とくに弥生土器が確認されたが、前層で述べているように見違いもあると



第5図 遺構指示図

思われ、それらは下位の7層に相伴するものだった可能性もある（一部には混入遺物も含まれている可能性もある）。

7層は、黒褐色土である。層厚は7~40cmを測るが、端的な薄層部分を別して、比較的厚層の層位であるといえる。また土質は有機物が多く、やや粘性である。層内には多くの10cm~人頭大の円礫を含み、弥生の文化層ということからみて、それらの礫には造構としての石垣も在存していると考えられる。また一方、北西端には後の田地や宅地として造成されており、搬入されたのではないか、と思われる不合理（端部で後につくり上げられたと考えられる石垣の一部）な石垣もみられた。そうした北西端の攪乱部分（第5図）からは、下位といっても、中には数点の鉄器・陶磁器が搬入していたのである。なお、本層にはまとまりをもった弥生土器が出土しており、下位面にはこれらと共に伴すると想定される住居址などの遺構が検出され、また少量の縄文遺物も出土している。



第6図 住居址遺構図

第3節 遺構

本遺跡には、大別して2期の文化層が認められる。その1つは、4層を中心出土した古墳時代のものと、7層の弥生時代のものである。このうち前者のものは遺構は検出できなかったが、後者の弥生時代のものと想定できるものは遺構が検出された。本項ではこの後者の遺構を中心に、以下記述することにする。

1. ピット(P)

ピット(P)と略称するものは、13穴検出された(第5図・第1表・図版5-c)。それらは、7層下位面のジャマである河床疊との層界に検出され、いずれも7層の黒褐色土が坑内に陥入しているのである。これらのピットと略称するものは、その坑形から柱穴跡であったものと想定されるが、調査区の中央部に散見されたP01・P02・P03・P11は、柱列などから想像しても、その用途・構築構造は不明であった。また一方、遺構の大きさから、これらをPあるいはSKと分類しているものの、P05としたものは、おそらくその坑形から、同地点で数度において、立て替えられ連穴した柱穴跡だったと考えられる。

そのほかピットが集中するのは、SIとした竪穴式住居址の東面側で、同坑内にも2穴検出されている。それらの大きさは径15cm程度のものから、40cmを測るものがみられ、深さは4~30cm測るものがあって、そこには統一性はなく、礎板を置いたという工夫もみられなかった。これらのピットがSIを中心として、西面側に確認できなかったのは、後世において石垣あるいは水田造成などに人為が加えられたことによって、搅乱されたことによるものと捉えられる。したがって、とくに西半面を中心として、遺物のとり上げには混乱を生じているのも事実であったのである。

2. 土坑(SK)

土坑(SK)と略称するものは、8坑が検出された(第5図・第1表・図版5-c)。いずれもこれらはピットと同様、7層と8層の層界面に検出され、7層の黒褐色土が陥入していた。SIの遺構は別にして、共伴遺物は確認できなかったものの、その上位面には特に弥生土器を中心出土していることから(第8図)、それらは弥生時代のものと想定できるものであると同時に、その原構築は7層上面から行っていたものと考えられる。したがって層界面に検出された遺構のみをもって、原形のものであったと判断することはできないといえる。

まずはそれを承知した上(層界面の遺構)でみていくと、2、3坑を除いて円形を呈したものが多く、その径は大きいもので80~125cm(SK02)、そして小坑のもので50cm前後のSK08(焼土痕)であった。またSK04とした不整形の大型のものは、搅乱された部分もあって判断しにくいが、長径は3mを有するものと想像された。これらはいずれも底面は緩かな孤状を呈し、しかも坑高は僅かであった(7層上位面から構築されていたから、もう少し深いはずである)。共伴遺物はないが、遺構上面の弥生土器の分布、とくにSK01の顕著さからみて、これらは弥生時代のものであったと想定できるものである。

第1表 遺構計測表

遺構	短径 cm	長径 cm	深さ cm	検出面標高 m	摘要
P 01	24.0	26.0	13.5	267.586	斜傾する
P 02	36.0	39.0	32.5	267.596	斜傾する
P 03	28.0	34.0	22.5	267.636	斜傾する
P 04	22.0	30.0	8.0	267.481	
P 05	18.0	60.0	13.0	267.521	
P 06	15.0	16.0	4.0	267.561	坑壁はきわめて緩やか
P 07	18.0	26.0	9.0	267.551	
P 08	20.0	30.0	8.5	267.546	連結したもの
P 09	14.0	20.0	5.0	267.541	
P 10	34.0	38.0	8.5	267.536	
P 11	19.0	20.0	14.0	267.381	
P 12	30.0	34.0	18.0	267.281	
P 13	24.0	32.0	7.5	267.286	緩傾である
S K01	88.0	96.0	11.0	267.611	
S K02	80.0	125.0	8.0	267.561	数個の礫石を伴う
S K03	92.0	112.0	29.0	267.591	
S K04	162.0	—	35.5	267.416	数坑存在していたものか、攪乱する
S K05	50.0	56.0	8.5	267.326	
S K06	—	—	18.0	267.291	
S K07	—	—	6.0	267.301	
S K08	24.0	44.0	7.0	267.371	焼土坑であるが、炉と思われない
S I 01	東一西径 260.0		26.0	267.531	
S D 01	24.0	270.0	7.0	267.281	坑壁は緩やか

現地表面標高 268.271m

(—は不明を示す)

3. 穴住居址 (S I)

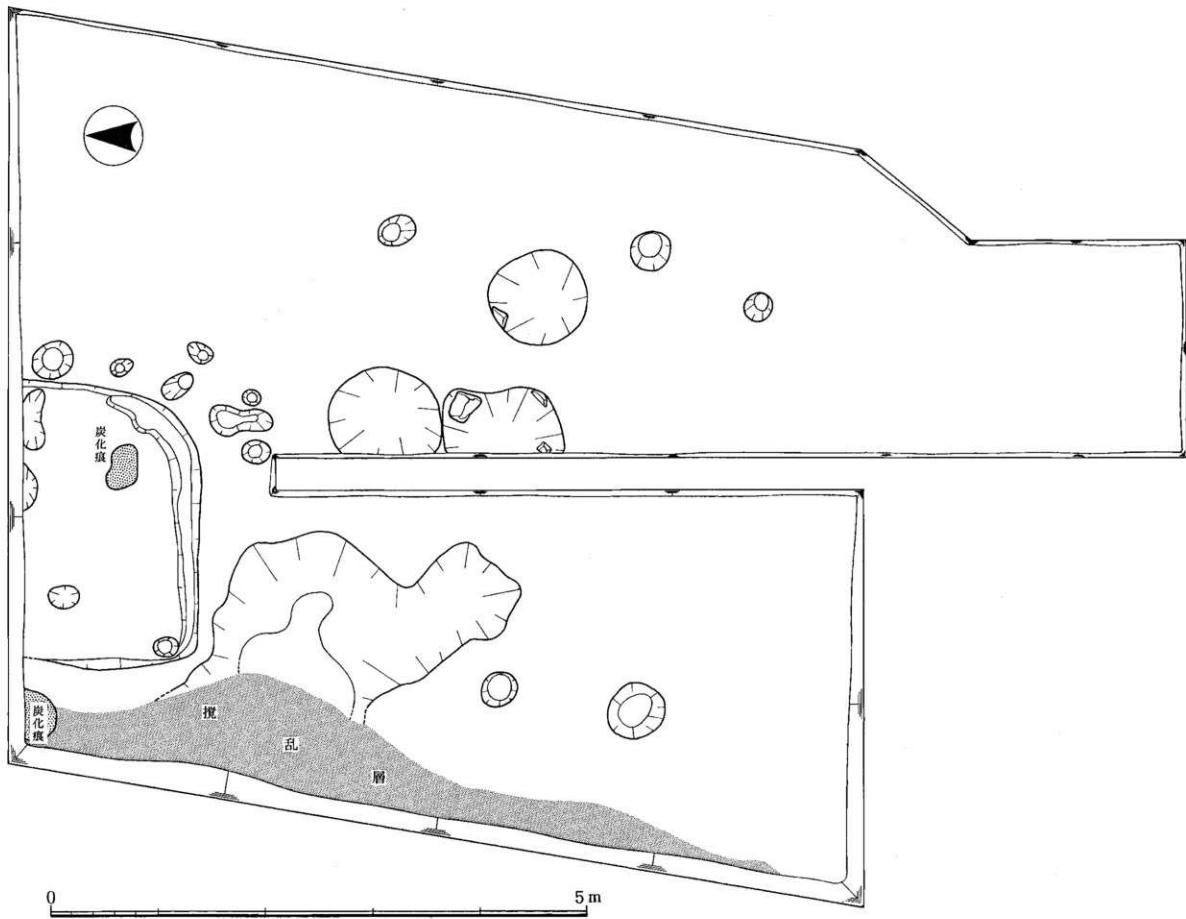
平面的検出された S I 01 (第6図・図版4) は、調査区の北西側に表出された。その北側は工事予定地でなかったために掘削することなく、また後の人為による攪乱もあって、S I の全体像は確かにすることはできなかった。

その S I の検出面標高は約267.53mで、表土から約74cmばかり下がった7層と8層の層界面に色調的に明確に表出したものである(図版4-a)。その坑内には7層の黒褐色土が陥入していたが、攪乱を呈した西面の上面一部には灰色した水田耕作土も認められ、また部分的に黄灰色土も少量嵌入していた。これらの影響か、数点の土師器・須恵器などの時代性を異にした遺物も出土したのである(第2表)。

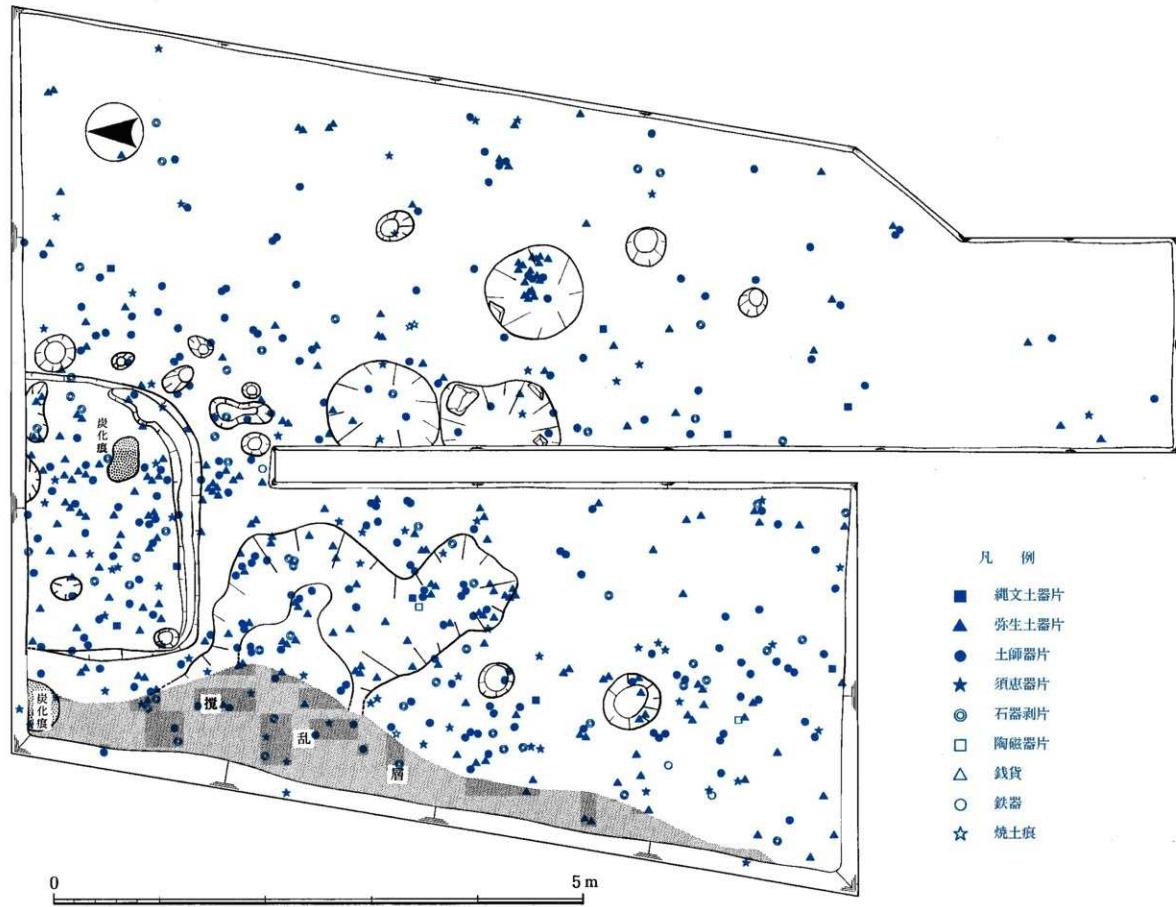
以下、半出された S I の遺構を計測から具体的にみていくと、原形をとどめていると思われる東一西方向のみの径は、約2.6mで、それは隅丸形を呈していたものと想定される。壁高は最大高で東辺部において26cmを測るが、やや下がる西辺部では約6cmと顯著ではなかった。傾斜は約70~80

度と緩やかであったが、その杭壁はしっかりとていて、分層することは容易であった。しかし、周堤部は確認することができなかった。また壁溝（S D）は南辺部に一部検出され、最大幅約24cm、長さ約2.7mで、両部の端部は尖滅し、深さは最大で7cmを測る。ただしその杭壁は「U」形を呈し、読みとれにくい貧弱なものであった。そのほかS I坑内にはピットが2穴、そしてピットか土坑かが不明なもの2坑と、焼土が嵌入したSK08が検出された。なお、このSK08の焼土塊は小振りなことから判断して、炉址としての機能をもつたものではなかったものと思われる。また、西辺のほぼ中央にあたると思われる搅乱層を呈した坑外のかたわらには、まとまった焼土、そして多量の炭化物が出土し、本坑との関連を思わせたのである。

(渡辺 友千代)



第7図 遺構図



第8図 遺跡平面分布図

第4章 出土遺物

第1節 遺物の出土状況

1. はじめに

遺物のとり上げについては、基本的には原位置記録法で行った。つまり垂直、平面分布の両面からである。しかし明らかに後世（水田造成が行われた以降）の手が加えられたと想定された表土から3層までのものは、実測せず、層名のみを把握する程度にとどめた。またその下部においても、表土などの上位層が陥入するなどの状況が認められた場合は、ただ「搅乱層」としただけで採り上げ、この場合も原位置記録法では行わなかった。そのほか、層位を把握しながら厳密に行ったつもりではあるが、後の整理の段階でみると、矛盾も多く、適確さを欠いているのは否めない。

以下、そうした事柄も含めた上でみていこうと思う。

2. 遺物の出土状況

本遺跡からは総数約750点余が出土している（第2表）。その内訳は、弥生土器片269点（35.7%）、土師器片244点（32.4%）、須恵器片111点（14.7%）、石器剥片45点（6.0%）、陶磁器片37点（4.9%）の順で、そのほか打製石斧・繩文土器片・鉄器などが出土した（第2表）。これらを詳細にみていくと、最も多いのは土師器・須恵器類を中心とした古墳時代に位置付けられるもので、とくに4層（暗灰褐色土）を中心として出土している。そして次に多く出土しているのが弥生土器片で、これは7層（黒褐色土）を中心としているが、そのほか2層や4層などの上位層にも確認されているのである。そしてつづくのは石器類の57点で、その大半は7層に認められたが、そのほか4層や2層、そして表土などの上位層にもみられ、弥生土器の出土層と同様な出土の仕方で奇異であった。これらには多少の層位の見誤りもあったであろうが、一方では該時期においての何らかの状況で、混入したことも充分考えられるのである。

さて、これらの石器類では45点の剥片が最も多い、そして損折した打製石斧を含めた13とつづく。そのほか敲石の5点や黒耀石製の石鎌（1点）なども出土した。また7層には数点であるものの、繩文土器片も出土していることから、石器類なども弥生期に相伴する以外にも、その多くは本片に伴ったものと思われる。ただ層位的な相伴性を欠いているとともに、明確な遺構も検出されていないことから、これらが混入遺物であるものなのか、また弥生期のものと複合していたものなのかなは判断しにくい。むしろ出土点数や、石器類の層位のばらついて出土する状況から捉えると、前者の可能性（混入品）があると考えられる。

また本遺跡では、そのほか陶磁器や錢貨・鉄器なども出土した。これは1～3層の上位層に出土したもので、点数は北西端部の搅乱層に混入していて、現代のものであった。

第2表 出土遺物集計表

分布調査分

出土層位	縄文土器片	弥生土器片	土師器片	須恵器片	打製石斧	磨 石	石 鋸	石器片	黒縁石片	縫 片	鉄 器	燒 土	陶器器片	銅 貨
1~2層	1			8					1			1		21 1
3 層	13	8	5						1			3		
4 層	1	10	23	8					5					
5 層	1	29	27	1					5					
合 計	2	53	58	22					12		4		21	1

本格調査分

出土層位	縄文土器片	弥生土器片	土師器片	須恵器片	打製石斧	磨 石	石 鋸	石器片	黒縁石片	縫 片	鉄 器	燒 土	陶器器片	銅 貨
1 層		7	16	9					4					7
2 層		13	10	16					2			1		7
3 層		4	1											3
4 層	1	17	67	51	2		1	6			(蛇紋岩)		1	
5 層	1	4	15	3										
6 層		7	6											
7 層	8	137	45	3	11	2		16		2	(乳白色)			
柱洞壁 (S)		12	10	2			1		2					
中央ベルト		17	10	2			2		3					
縄文層 (最古部)		2	3	2								2		2
合 計	10	216	186	89	13	5	1	33	2	3	3	1	16	3

第2節 実測遺物

1. はじめに

750点余りという比較的多くの出土遺物があったものの、土器については完形品や、また復元が可能なものはなかった。いずれも小・細片ばかりで、中にはそのために種別できないものもあったのである。これらの中から、できるだけ大片を抽出するとともに、一方で特徴的且つ時期色が顕著なものを採り上げることにした。

また図掲は、種別に一応5つに分けることにし、つまり縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、そして石器類とし、図掲順もこれに従った。

2. 実測遺物-1 (第9図～第10図・図版6-a)

1～3は縄文土器片で、いずれも南東側の7層に出土したもの。そのうち1は口縁部で、短く外曲し、その口縁部を欠く。また器肉は薄く、胎土はきわめて精緻で焼成も良好である。色調は、橙色を呈して腐蝕化しているが、器面には部分的に磨き風がのこり、精製系の土器であったことを窺わせる。2は精製系の胴部片で、内外面とも精緻に磨かれ、黒褐色を呈している。また胎土には2mm程度の石英を含んでいて、焼成は堅緻である。3は、橙褐色をした胴部片。やや腐蝕をしているが、器面は研磨されている様子が窺われる。胎土には僅かな石英や雲母該当みられ、焼成は非常によい。これらの縄文土器は、他の図示していない土器なども含めて捉えると、一万田2式土器系のものと思われる。

つぎの4～9は、弥生土器片。そのうち4は、頸部から口縁部にかけての甕である。その頸部は強くはないが、やや「く」の字形を呈して口縁部に緩やかに外反する。外面には縦方向のヘラ描き

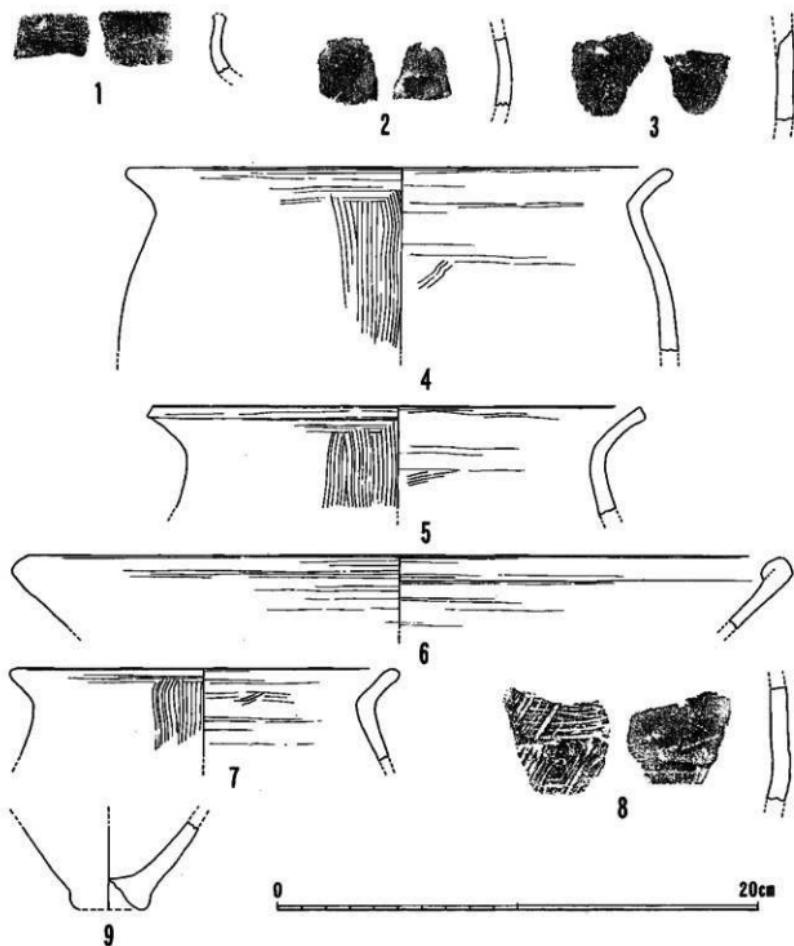
直線文が頸部から下年にかけて施され、口縁部は横方向のナデである。内面も全体を通じて横方向のナデを施している。胎土には2~4mm大の石英や石粒を含み、焼成は良い。また色調は淡赤色で、外面には煤が付着している。5も、4と同様の施文で、色調も同じである。ただし口縁部は、やや角ばっているのが異なり、胎土には雲母がみられる。6は、外から折返されて、内側に肥厚された口縁部。器形は鉢状のものと思われるが、はっきりしない。色調は腐蝕して白灰色を呈し、胎土は緻密で、黒っぽい。腐蝕しているため、調整は判りにくいが、内外面ともナデのように思われる。7は、小形の甌の口縁部である。調整方法などは上掲のものと違わないが、前者と同様、腐蝕して白灰色を呈している。8は胴部片。外面にはヘラ描き直線文を部分的に斜め状に交叉させ、調整している。また内面は、ヘラ描き状のもので整形した後、ナデで調整している。色調は茶褐色を呈し、胎土は緻密であり、焼成もよい。9は底部である。外面には僅かヘラ描き調整文がみられるが、仕上げはナデである。また内面は丁寧なナデで、焦げのためか黒褐色を呈する。外面の色調は、部分的に赤みをおびて、肌色である。胎土は緻密で、焼成は良好。

おそらくこれらの弥生土器らは、形態や色調の仕方などからみて、「弥生土器の様式と編年」のいうところの「1~3」に併行するものと思われる。つまり口縁部は弱く「く」の字形を呈して短く、頸部から胴部にかけて多条のヘラ描文を施すといった、やり方である。また内面は丁寧なナデ、といった該期の特徴にみられる土器群であった。^{註1)}

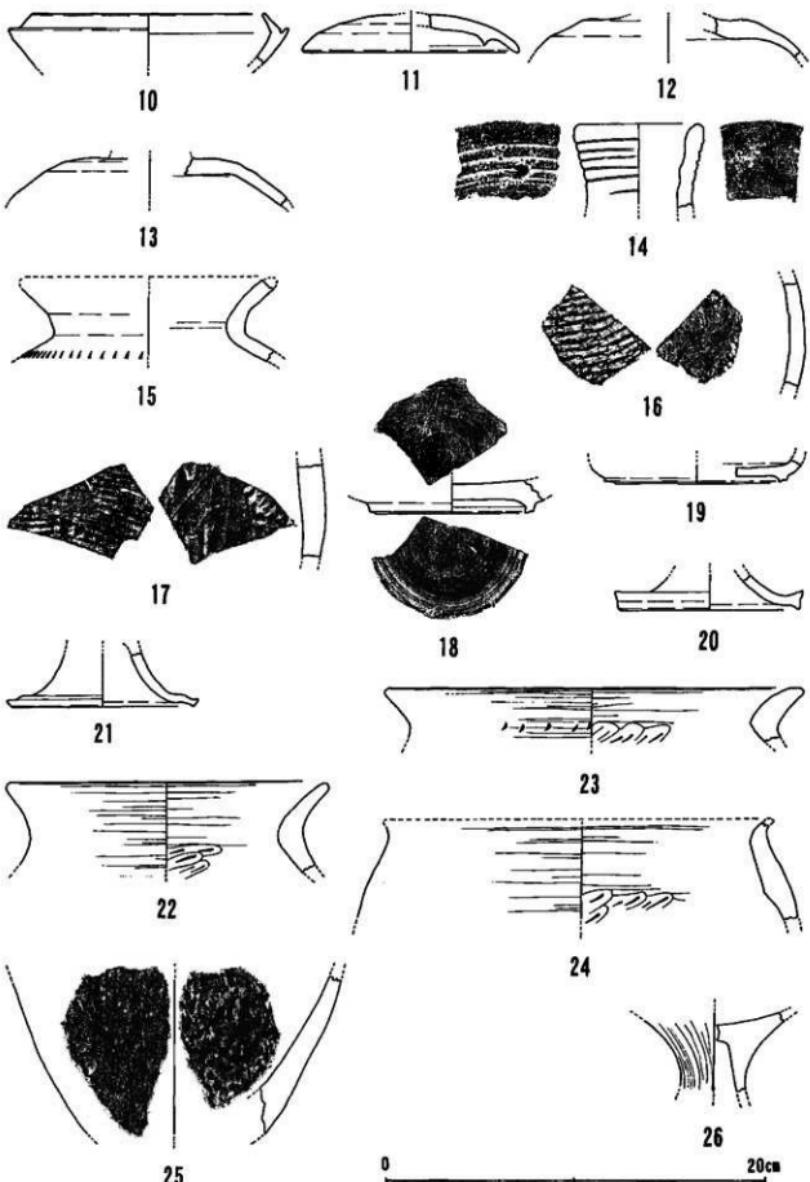
10~21までは須恵器片で、10~13は蓋杯。そのうち10は、杯部の口縁部である。口径は約14cmで、その蓋受は内傾するものの1.4cmあって、細く鋭さがみられる。底部形はわからないが、口縁部から想像すると、やや斜めに直線に下がるのではないかと思われる。内外面ともナデで、青灰色を呈する。11は、蓋部の口縁部で、口径は約10cmである。大井部は低く、ゆるやかで、身受けのかえりは△形状に下垂する。色調は内面は青灰色、外面は灰色で、静止ナデである。12は、蓋の肩部片である。外面にはヘラケズリ痕跡的な凹凸をのこし、口縁部に向かって急にせばまる。内外面とも回転ナデ、色調は淡青灰色で、焼成は堅緻である。14は、長頸壺の口縁部である。外面には横位の数条の凹みの強い沈線を施し、口端部に向かってやや外反する、が口唇は開かない。器肉は厚く、器面には自然釉が付着し、青黒色を呈す。

15は、甌の頸部片である。頸部は短くUの字形に外反する。外面肩部には斜め方向の連続文が僅かに看取できる。内外面ともナデを施しているが、内面の肩部には僅かにタタキメの痕跡が窺われる。色調は青褐色を呈し、内面は灰色である。16・17は、胴部片である。そのうち16は、外面を平行タタキメ文を施し、内面はナデ調整。また17は、外面を併行タタキ文を施し、内面は同心円文を施した後、部分的にヘラケズリで調整している。色調は前者が灰色、後者が青灰色で器肉が厚い。

18~21は底部片である。このうち18は、高台径約8.5cmを測り、その高台との接置面との差は0.6cmである。また、その接置底面部は逆「U」形を呈して外方に向く。内面は不整形のナデで、また外面の底部に硯に代用として使われたらしく、やや凹み艶滑である。色調は灰色で、焼成は堅緻。19は、高台部が0.3cmと低く、その接置面は前者と同様逆「U」形を形成している。20・21は、高杯の脚部片である。そのうち20は、底部径約9.5cmを測るもので、その端部面は凹線状を成している。さらにその両端部は鳥嘴状を呈している。また基部の器肉は平均的で、弧状に描き曲線も滑



第9図 出土土器実測図(1)

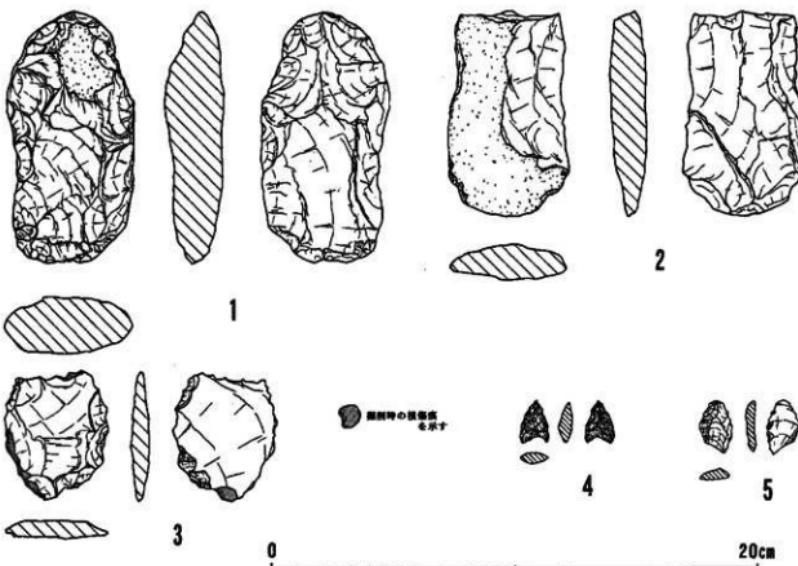


第10図 出土土器実測図 (2)

らかである。21は、底部径を約10cmを測るもので、その端部面は円みをおびている。裾部は前者に比べて、やや急であるが、端部に向かっては低くより開いている。また端辺部は、底部からのへラ調整のために曲線面をつくり出している。外面には自然釉が付着し灰色、底部の内側は青灰色を呈する。とくに胎土は堅緻で焼成はよい。

以上、須恵器類をみてきたが、その多くは小・細片ばかりであり、時代性を特徴付けるものが少なかったために、その位置付けは難しい。しかし数点の蓋杯などの特徴からみると、7世紀中ごろから同後半期のものと想定される。おそらく長頸壺の口縁部も、本地域には資料が乏しいが、その形態から同時期に位置付けられるものであろうと考えられる。

22~27は土師器片である。そのうち22は、土師器の口縁部片で、頸部は短く、弱い「く」の字形を呈して外反する。外面には意識的と思われるようなハケメが横方向に施され、内面口縁部はハケメの後、ナデを施す。器肉は厚さがなく、胎土には3~5mm大の石粒がみられ、橙褐色である。23は頸部からやや直線的に短く外傾するもの。その頸部外面には「ノ」の字形の刺突文が横方向の疎間的、不整形に施されている。24は、頸部片である。口縁の端部は欠くが、短かく外曲して先が尖ったような整形が看取りできる。胴部はずんぐりとし、腐蝕していく調整は判りにくいが、縦方向のハケメと思われる。また内面側は肩部に強いケズリがみられる。色調は黄褐色で、焼成は余り良くない。25は胴下部で、外面はヘラ調整の後、縦方向のナデである。また内面はヘラケズリが顕著で、胎土は2~3mm大の石粒を含んでいる。26は、杯部と脚部の腰部である。杯部の内面側は



第11図 出土石器実測図

ナデで、脚部の内面側はヘラ整形痕が顕著。27は、底部で、外面はナデで、橙褐色を呈し、平底である。

3. 実測遺物—2（第11図・図版6-b）

以下、石器類である。そのうち1・2は打製石斧。前者は器長約10.5cm、最大幅5.3cmを測り、やや小振りのものである。石材は凝灰岩で、器面は灰色に腐蝕する。整形は縁辺部から打撃を加え、打製したのみで2次加工的なものはみられない。2は、基部が損失しているもので、その器長は8.5cm、最大幅は約5cmで、厚さは約1.5cmを測り、小振りな打製石斧である。石材は玄武岩で、背面には右辺からの1撃の打裂がみられるだけで、のこりは自然面である。また腹面側からも2・3度の打撃を加えたのみで整形する。3は、削器である。石材は安山岩で、離剥した後、背面側の両辺から2次加工としての剥離調整を施し、腹面のとくに左辺にも一部剥離調整する。4は、黒耀石（黒褐色）の石鎌である。器長は約1.2cmで、厚さは0.7cmを測り、ずんぐり型のものである。また周縁部の打裂は一様性はみられず、美形ではない。5は、乳白色の黒耀石の剥片で、意図的な2次加工は認められない。

（渡辺 友千代）

〔註1〕 松本岩雄 『石見地域』—「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編」 正岡睦夫・松本岩雄編 1992

第5章 小括

本遺跡の調査は、第1章で記述しているように、開発に伴う緊急のための調査であったため、調査日数も少なく、また掘削面積も狭かったということもある、腰をしつかり据えて詳細に全貌を明らかに、また検討していく余裕がなかった。そのことを最初に承知していただいた上で、反省も込めて、以下気付いた点のみを指摘する程度としたい。

まず本遺跡では、大別して4つの文化遺物があったことが確認された。それは縄文・弥生・古墳・そして近世以降の各文化期のものであった。そのうち縄文時代のものは、少量であった土器の形態から判断して、これらは三^[註1]方田2式（黒色磨研系）と併行するものと想定された。しかし遺構を伴わなかったということや、また7層を中心として出土したといつても少量で、一方では他層にも認められるなどの矛盾から、それらは混入遺物ではなかったのかという問題をのこしてしまった。そしてつぎは弥生期のものであるが、これは土器形態から判断すると、前期の終りごろのものと考えられる。包含層は7層で、その下位面には竪穴住居などの遺構も検出されており、成果はあったといえるだろう。しかし、調査区の西半、とくに北西端部は、複雑な構造を呈していたために、実測にも混乱が生じ、遺構を検出したにもかかわらず、そこには具体的な弥生の文化誌を浮かび上がさせることはできなかった。このことは各期におけるところの遺物または層位関係にも及び、本遺跡のネックでもあったのである。

暗灰褐色土を中心とした4層からは、土師器・須恵器が狭掘にしては多量に出土した。これを調整法や形態から捉えると、それらは7世紀後半のものと判断された。ただし遺構は検出することができなかつた。これは恐らく薄層で層位間が詰まっていた関係で、見逃したためと思われる所以である。したがって遺物の実測（採り上げ）においても、勘違いをしているのも事実であろうと考える。

そしてもう1つの文化遺物は、陶磁器類や金属類、または錢貨などの現代期の遺物である。とくにこの中で多かった陶磁器類であるが、顯著に近世期のものと思われるものは見出すことはできず、そのほとんどは現代のものであった。また金属類においても然りで、錢貨においてもそうであった。これらは遺構との結び付きが明らかに不確定で人為層というべき3層上位を主体としているため、本報告では、これらの遺物は一切対象としなかつた。

（渡辺 友千代）

〔註1〕 杉村彰一－「三方田2式土器」－『縄文時代研究辞典』戸沢充則編 1994

(a)

調査地点遠望
(北から)



(b)

調査地点の草刈作業
(北東から)



(c)

調査区の実測作業
(北東から)



(a) 発掘作業風景（北から）



(b) 中央ベルト壁の層序状況（北東から）



(c) 西壁の層序状況（南東から）



(a) 南西からみたSKO-1（半截検出状況）



(b) 土坑・ピット遺構の完掘状況（東から）



(c) 須恵器（右）・石器出土状況（左）





(a) 竪穴住居址の表面状況（東から）



(b) 西からみた竪穴住居址の検出状況



(c) 東からみた竪穴住居址の検出状況

(a)

北壁に表出した黒色土陷入状況
(竪穴住居址)



(b)

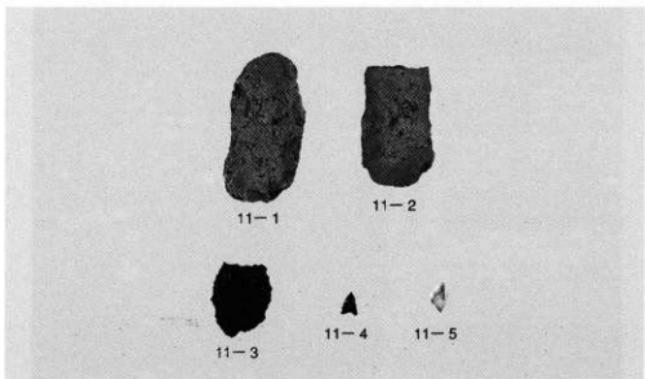
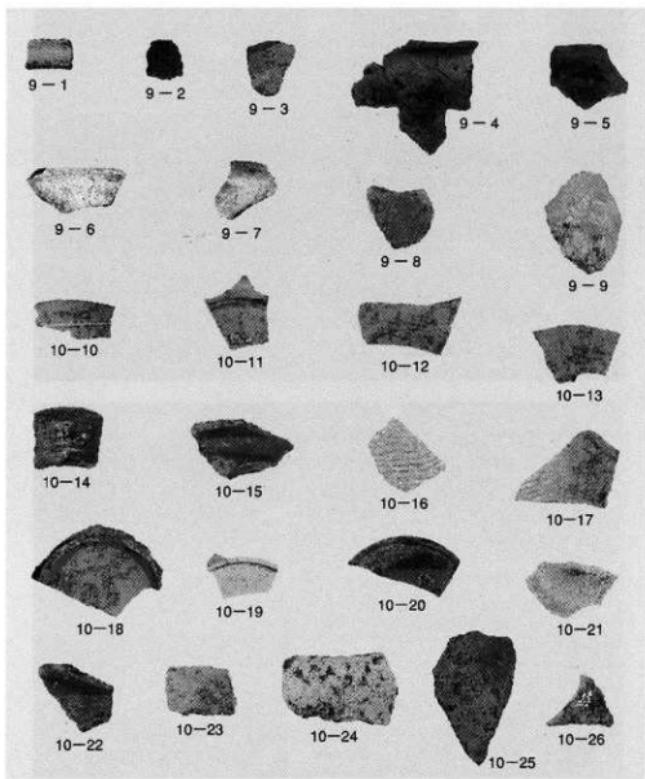
西からみた竪穴住居址などの
遺構検出状況



(c)

南からみた遺構検出状況





平成10年3月18日 印刷
平成10年3月25日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告第25集

長 通 遺 跡

発 行 匹見町教育委員会
島根県美濃郡匹見町大字西見才1260
印 刷 株式会社 谷 口 印 刷
島根県松江市東長江町902-59